

第五章

明日に向かって

中四国学剣連への期待

各地の高校の現場から

剣道の日常化

愛媛県立松山南高等学校

渡辺道德



中四国学生剣道連盟四〇周年を心からお祝い申し上げます。

不肖私と中四国学生剣道連盟とは、こよなくこの連盟を愛し発展を願っておられた故大森玄伯先生が大学の大先輩ということもあり、いつも「中四学剣をよろしく頼むよ!」とお言葉に引き寄せられながら、もう三〇有余年もの長いお付き合いとなりま

す。

その間ずっと、つぶさに連盟の活動を見てまいりましたが、年輪を重ねるごとに盛大、かつスムーズな運営に感心すると共に、これは陰に陽に献身的尽力をされてきた諸先生、先輩、そして学生役員諸士のたゆまざるご努力の賜と、心から賛辞をおくります。

大会成績につきましては、とすると関東学連に押され気味ですが、過去栄光のチャンピオンに輝いた大城戸選手をはじめ、各選手の精進の結果が近年良い結果を生んでいると思います。今後学生諸君のなお一層の努力を願うものであります。また我々高校指導者としても良い選手を育成し、大学に送り込みたいと思います。

さて大学は、学生として剣を修める最終段階であります。将来社会人として立派に生きていくために剣の修業を通して、社会的自立のできる人間の成長を強く望みます。剣道の日常化とでも言いましょうか、社会では自らを律することができれば、一方では他を修めることもできるわけです。剣道は相手があつて修業できるものです。常に自らを謙虚に、そして相手を尊重する精神、すなわち仏教の教えにも

あるように、他を許すことによって、自分をたてていく、その根底にはいつも謙虚な自分の自我への反省と、他人を「わが身にひきあてて」考える心の広さが分かちがたく共存しているわけです。

勝負勝負の剣ではなく人間形成の場として取り組み、将来立派な社会人となれることを願ってやみません。

四〇周年を機に学生諸君の今後の活躍と、中四国学生剣道連盟の益々のご発展を祈念し、お祝いのことばといたします。

礼の精神

岡山県立西大寺高等学校

桜間建樹

中四国学生剣道連盟四〇周年を記念して、記念誌を発刊されること、そしてこの四〇年間、連盟の隆盛に貢献された皆様のご活躍を思いますと、まことにご同慶のきわみ、衷心よりお祝い申し上げます。



中四国連盟は名実ともに全日本学生剣道界の名門であり、卒業生の皆様方は各界に進出され、社会に占める役割、そして剣道界での正々堂々のご活躍は目をみはるものがございます。こうした卒業生の皆様が青春時代を過ごされた連盟が、なお一層発展して行くためにはこれからの若い学生剣士諸君の頑張りが必要なことはもちろんですが、それを陰で援助すべき我々の責任も大なるものと、心引きしまる思いがいたします。

さて、最近の剣道界は試合偏重で、日本古来の伝統文化としての本来の姿が見失われているという声をよく耳にすることは、剣道を志す者としてまことに残念なことでございます。この現象を正して行くには、一人一人が剣道の特性を本当に理解し、楽しさ素晴らしさを体得し、それを後世に伝えていくことだと思っております。私は、今高校生と共に毎日汗を流しながら、以前に私の先生より教えていただいたことを実践しています。

それが「礼」の精神です。相互にお願いしますと立ち上がり、全身全霊を込めて打ち込む。見事な一本。打った方も、打たれた方も、オウと感動し、打たれた方は、自然にまいりましたと頭をさげる。打った方もそのわざに感激し、感謝の気持ちが自然に湧いてきて、ありがとうございますという気持ちになる。それが剣道の礼の精神ではないか、と明快

に教えていただきました。私は現在その精神を高校生に伝えております。

中四国学生剣道連盟の皆様が「交剣知愛」の精神をいただき、地域の中核となり、少年剣士達に夢と感動を経験させ、地域の剣道の発展に大きく貢献してくださることを期待いたしますと共に、中四国学生剣道連盟のなお一層の発展をお祈り申し上げます。

大学と高校の連携を密に

香川県高体連剣道部専門委員長・高松第一高等学校

國金義典



中四国学生剣道連盟が発足四〇周年を迎えるとの事、連盟関係各位の戦後の混乱期よりの復興から心血を注いでの御努力に心より敬意を表し、御祝いを申し上げます。

香川県高体連剣道部出身の生徒達が、中四国の大学に進学し、そこで大学の先生方の熱心なご指導をいただき、心技体共に大きく成長した事に衷心より御厚礼申し上げます。

我々高校の剣道指導者は日頃、大学の先生方の研

究された本を読ませていただいたり、講習会等で御指導を受け資質の向上を図っています。そうしてまた高校生を指導しているわけであります。時には、直接大学の先生の御指導を受ける事ができないかと切望していましたところ、国体の強化合宿で強化選手が岡憲次郎先生、湯浅晃先生に御指導を受けたり、植田一先生、山神真一先生に御稽古を御願ひできる機会がありました。そして、大いに成果をあげる事ができました。

また、本年一月一日(日)香川県青年センター体育館で、香川大学松楠会(教育学部卒業生の会)の主催、香川大学剣道部(監督山神真一先生)が主管となつて中学生、高校生剣道部員のための第一回研修会が開催されました。講師は大阪体育大学教授作道正夫先生、神崎浩先生、香川県警松本政司先生でした。高校剣道指導者一四名、生徒男子二二名、女子一八名、計四〇名が参加させていただくことができました。

松本先生の「私と剣道」の講演では、第八、九回世界選手権団体優勝までの修業過程での、やる気、基本、工夫の大切さを学びました。作道先生には、日本剣道形を指導していただきました。先生が長年研究された剣道形の指導法には、目から鱗が落ちた感じがしました。合気、目付、姿勢、呼吸、懸け声等の基本から、形における「先生の先」の指導、生徒は生き生きと目を輝かしての稽古で、成果は抜群でした。

昼食後、剣道形の総復習、その総括、剣の修業についての話は心の中に沁み込み感銘深いものでした。最後に講師の先生との稽古、誠にすばらしい講習会でした。

この講習会の継続を熱望しています。高校の教師も大いに研究せねばなりません。大学の先生方には、

公務御多忙は百も承知ですが、高校生への講習会、御指導をぜひ御願ひ申し上げる次第です。そうしていただける事が高校大学の連帯にもつながると信じています。

そうして剣道の正しい伝承ができる事が、私の期待であります。

大学と地域の盛んな交流を

高知県立高知南高等学校 吉本 貢



星霜四〇年。加盟四三大学の連盟に、発展されましたことをお祝い申し上げます。

発足当時から今日までの経緯は、記念誌で明らかにされますが、時代の流れとは言え現在の盛況に至っておりますことは、関係者の絶え間ない努力の成果であり、心より敬意を表します。

範士八段腰山先生が会長として、教士七段大塚先生が評議員として、高知県から出られていることは、我々の誇りとするところです。

この時に臨んで、高校剣道の指導に携わっている者として、兄貴分ともいえる大学（連盟）側への要望や期待することなどを、述べさせていただきます。

① 教え子、または地元の高校を卒業した生徒が、中四国地区の大学に入学している場合、剣道を続けてやっているだろうか？と気になります。入部している生徒は、成長と活躍に関心が移ります。大学は、高校さらに小・中学校剣道の延長にありますので、大事に育ててくださることを願うものです。他県から高知の大学へ入学してきた選手で、筋のよい正しい剣道をする学生には声をかけたくなり、どこの県・なに高校出身ですか？と聞くことがあります。卒業後も剣道を続け、生涯剣道を目指して欲しいものです。

② 各県で事情に違いがあるかも知れませんが、大学生と地域の高校・一般（剣道連盟会員）との交流の機会を、できるだけ多く作れないものだろうか？と思います。

地域の剣道競技力向上のためにも、大学独自の部活動にとどまらず、今まで以上に連携・協力をお願いしたいものです。（合同練習・試合、一般大会への参加、他大学の遠征試合・合宿等）

③ 「参加することに意義がある」から「勝つことに意義がある」まで、いろいろの取り組みがあると思いますが、後者に厳しさ・真剣さが見られます。勝利を目指して意欲を燃やすことによって、人生のよい思い出を作ってください。

④ 思いつきで恐縮ですが、他学生剣道連盟の行事を参考にして、新しい催しを検討してみてもどうでしょうか。（学生男女・卒業生を含む、中国・四国地区対抗・選抜個人試合等）

終わりに、中四国学生剣道連盟の存在を、後に続く学生・指導者に引き継いで、さらに伸ばしていただきたいものです。

益々、連盟が充実しますようお願いとともに、各大学剣道部のご健闘を期待します。

剣道指導者の育成

島根県高体連剣道部専門委員長・大田高等学校

井上和朋



この度中四国学生連盟が四〇周年を迎えられ、記念誌が発行されるにあたり、その企画・編集の御苦勞に対し心より敬意を捧げます。

私が大学四年生の時（昭和五〇年卒）、二〇周年記念として全国学連OB、中四国学連OBと現役中四国学連との個人戦記念大会が盛大に開催され、その大会に出場した思い出は、つい昨日の出来事のように浮かび、月日の過ぎ去る早さというものを痛感しています。

毎年一―二回、大会の審判員として参加することにより、次第におぼろにかすんでいく大学四年間の日々を思い起こすと共に、学連との関わりを維持しています。

学連の活動の中心的な業務は、「剣道指導者の育成」と「各種大会運営」が組織的に連携をもち効果的に実施されることであるという観点から、本連盟に對し考えることを述べさせていただきます。

昭和五九年を境に高校剣道も人口減が始まり、以来本年度まで減少し続け、小学生に至っては高校生の減少率とは比較にならない程大きく、その余波は大学生にも当然あると思います。

例年、一・二回は審判員として大会に参加していますが、毎年同じ県（五月松山・八月広島・十二月岡山）での開催ということもあり、観客及び応援も年々少なくなっていく、開会式などの空席のギャラリを目の当たりに見ると、一抹の寂しさを感じています。

特に一二月に開催される新人戦くらいは、各県持ち回りで開催した方がいろいろな意味での学生剣道はもちろんのこと、剣道全般についての発展・普及につながると思います。

最近、中四国の各大学へも中央より若手の専門家の指導者が多く採用され、各方面で幅広く活躍されておられます。そこで、高体連同様、調査研究を持ち寄り、剣道人口の減少の原因についての解明と、学生達が「生涯剣道」へとつなげていくてくれるように、今まで以上の何らかの施策を考えていただきたいものです。

高校・中学生の生徒数減も急激に進み、教員として採用される剣道指導者も極端に少なくなり、学校関係でも専門家の人数が頭打ちの状態なので、専門家以外の顧問への期待がどうしても大きくなり、また、学校関係以外の大学剣道経験者にも直接的・間接的に指導者として携わっていただかなければ剣道の人気、あるいは支持は下落の一途をたどると考えられます。そこで、今後益々大学四年間を真に剣道に打ち込まれた人材に対する期待が大になってくるのではないのでしょうか。

大学剣道の大会内容を充実させるための最も重要な影響を与えるものとして、試合の審判員の態度・

技術がありますが、私自身大学時代審判員の判定に對し自分の力のなさ以上に、何度となくその判定に對して腹立たしく感じたことがあります。大会の前日に一時間以上の研修会並びに稽古会を行ない、審判員の意志統一をはかり大会に臨んでいます。その出席率の悪さに疑問を抱く以上に試合に参加する選手達に申し訳ない気もいたします。また、剣道指導者・審判員として、その基準となるべきものは、やはり己自身の稽古に日々錬磨することの他何事もないのではないのでしょうか。その中で身についた技術をもって審判に臨めば、選手・監督も納得するのではないでしょうか。

私自身の人生で長くもあり短くも感じられる生涯の中でも、最も輝いていたであろう大学四年間を、中四国学生連盟の中で活躍できた幸に感謝しているところです。この輝かしい四〇周年の歴史と伝統の上にたつて、中四国学生連盟が一層飛躍発展されましよう心から祈念し、発刊に寄せる言葉とします。

地元大学の情報を

徳島県立富岡西高等学校

本田敦彦



徳島県内の高校剣道部の卒業生は徳島県内をはじめ多くの中四国連盟の大学にお世話になっていて、各大学の先生・監督の皆様方のご苦勞にこの場をお借りしましてお礼を申し上げます。

徳島県立富岡西高等学校に勤務して今年で八年になります。八年の間、インターハイに団体四回出場・個人では七名出場し、全国選抜大会にも一回出場しましたが、体育の教員として剣道の指導者を目指し大学に進学した生徒は一名だけです。この生徒が入学・卒業させていただいたのが島根大学でした。

島根大学の境先生は、物事にしっかりと考えたを持っていて人物で、剣道の技術的・精神的・学問的指導を徹底して行なっていました。さらに、成績表を提出させたり面接をされたりと、学生の将来を思い大変温かい指導をしていただきました。本人は現在中学校の教員をしており、本人・両親とも大変感謝しています。

このように、中四国連盟の皆様方は学生を思い親身になって指導していただいていて、進学した学生は全員が行なって良かったと感想しているわけですが、剣道関係の雑誌でも関東連盟以外の大学の試合は扱われる紙面が小さいので、関東・関西に比べても知名度が低く、徳島県の現役高校生に良いイメージや情報が伝わりにくい状況にあると思われます。

私達高校教員としても、生涯剣道を目指し剣道人口を増加させ剣道の発展を考えるためには大学剣道を抜きにしては考えられません。地元となる中四国連盟の温かいご指導で、多くの生徒を専門家や社会体育の指導者として育てていただきたいと熱望します。

そのためには、私たち高校教員も多くの情報を現役高校生に伝えたいと考えています。たとえば、中四国連盟の試合のポスター配布、写真付きの試合結果、全日本出場選手の紹介、各大学の剣道部の紹介、

中四国私立大学全体の大学セレクトション日程の案内、中四国大学の一般・推薦入試の案内などです。中四国連盟事務局がまとめて県高体連剣道専門委員長に配布案内すれば、県下各試合の抽選会等を通して各高校に情報が行き渡ると思っています。情報があれば生徒は中四国の大学を希望することも多くなり、教員・監督側も受験校の指導をしやすくなると思います。以上は、現在の大学の状況をあまり知らない私個人の意見で、本来教員・監督側が調べるのが当然ですが、なにぶん情報が少なく困っている状況です。また、事務局の仕事が増えたり実現不可能な事柄もあると思いますが、検討していただければ幸いです。最後になりましたが、中四国連盟の四〇周年を祝し、これからの益々のご発展を祈念いたします。

一歩のゆとり

鳥取県高体連剣道部専門委員長・倉吉北高等学校

岸田 芋



中四国学生剣道連盟四〇周年記念誌発刊にあたって、一筆をとるという依頼を受け困惑しました。この二

四・五年学生剣道についてはほとんど接する機会がなかったからです。何をどう書いたらと思いながら『将棋世界』一〇月号のページをめくっていると、弦巻勝著「ぼくのアルバムから―名人駒」というタイトルと駒の写真が目にとまりました。短い文章だったので、なにげなく目を通していると、ハッと思いつたので、あたかも所があり、再度読みなおしました。その文章は次のような文でした。

「歩一枚で一〇万円とも一〇〇万円ともいわれ、将棋連盟が火事にでもなれば、真つ先にこの駒だけは持ち出すべしと言われているのがこの名人駒――中略――駒師、奥野一香の作である。――中略――僕は棋士のお宅におじゃますると、持っている一番良い駒を見せていただいていた。升田幸三九段は影水の駒を見せ、開口一番『この駒はダメじゃ……歩が一枚たらん……。――中略――これが駒じゃ……。』九段は宝物のように、いとおしく駒袋から出された。撮影のためならべてみると問題はない。将棋の駒は歩が一枚あまらないうとダメだと言う。なるほど一枚あまる心持ちか……。その時学んだ。」なるほど、一枚あまる心持ち。この語句はなんと含蓄のある言葉だろうと考えさせられました。

近年世界大会、全日本選手権等を始めとして各大会には熱狂的なものがあるように思われます。しかし試合内容についての論評は決して手放しでは喜べないものが多いように思えます。

試合に出場する以上、勝ちたいと思うのは当然りまえのことです。しかし、なぜ試合内容に対する論評には喜べないものが多いのでしょうか。剣道においての勝負は、最も重要視されるものの一つですが、それ以上に大切な何かが求められているのではないのでしょうか。「一歩あまる」心を持つことも大切なことではないかと思えます。

目先の勝負のみにとらわれず、ゆとりを持って剣道を考え、修業することを生涯を通して行なっていきたいと思えます。

学生剣道に期待する

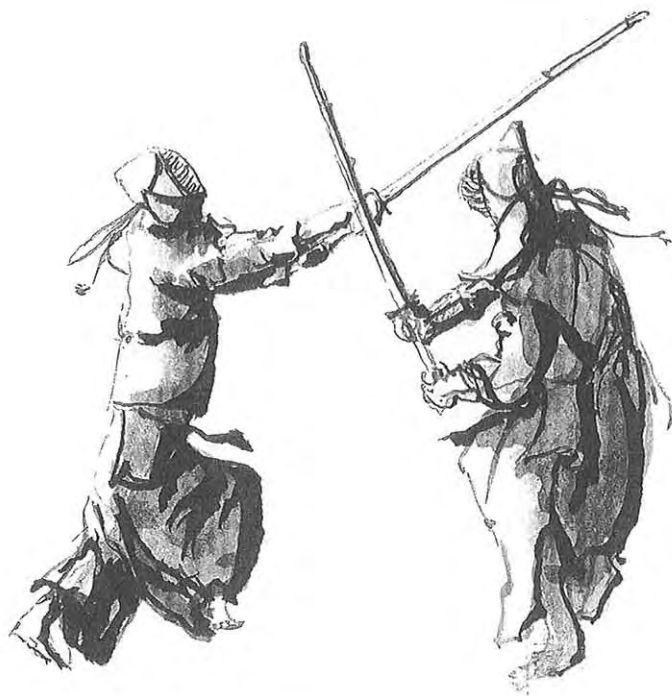
広島県高体連剣道部専門委員長・祇園北高等学校

藤原崇郎

学生剣道をこよなく愛しておられた大森玄伯範士は、大会が近づく頃になると、学連のOB諸氏に「審判に来てもらえないか」といつも声をかけておられました。私は仕事の関係で練習試合や遠征、それに自分の試合が重なることばかりで、お断りする機会が多く、恐縮の思いをしていました。それでも先生は大会が終わると、プログラムに大会成績を記入されて、にやかな笑顔で大会の様子を話されながら渡してくれたものでした。当時は、若気のいたりでしようか、あまり深くその意味を考える時間を持つことはありませんでした。

さて、学生時代の四年間とは、生涯剣道の中にあつてどのような時期、どのような意味を持つものなのでしょうか。

高校剣道界の剣士を称して、静岡の井上範士の言を借りれば、成虫を前にした「蛹」だと言われています。また、剣道とは、スポーツの要素を持った武道である、先輩の馬場欽司氏は述べています。この事については、私も全く同様のとらえ方をしています。我々高校剣道の行く先に、学生剣道があると考えるならば、学生時代の剣道は「蛹」から「成虫」



へ変革をはかる時代であろうし、大いなるスポーツ的要素を少しずつ削減していきながら武道へ昇華していく時代と言えることができるのではないだろうか。運動能力の優れた者が常に勝者であったり、器用さのある選手に栄冠が輝くことをいつまでも認めていてはどうて生涯剣道の考え方には到達し得ません。だからこそ学生時代に、道の深遠さに魅力を感じたり、得体の知れない人間の「気」の力を発見したり、さらには自分自身のこれからの人生に剣道の必要性を感じることができたりするのはないでしょうか。

そう考えていくと、大森範士が、明日の剣道界を背負って立つであろう学生剣道に対して、情熱を傾

注していた姿が少なからず理解できるように思えるのです。どうか、学連のOB諸氏のみならず、全国の多数の剣道家が暖かい目で学生剣道を支援していることを忘れることなく、自らのために、日々の錬磨を怠ることなく精武され、今後益々の隆盛をはかられるよう期待しております。

感動できる大会に

山口県立防府西高等学校

青木 寛



中四国学生剣道連盟四〇周年を迎えられてまことに
おめでとうございます。

先般（平成六年九月二五日）、山口市において全日本東西対抗剣道大会が行なわれました。その時の各選手の試合はまことに立派だったと思います。特に反則が少なかったというのに深い肝銘を受けました。このことが心に深く残っていたものですから「中四国連盟への期待」という執筆依頼も、自然と理想に近いことを考えるようになりました。

また、学生の大会は最高学府に学ぶ者の大会でなければならぬと常日頃から思っておりますし、

剣道の理念である「剣道は剣の理法の修練による人間形成の道である」にも沿うものでなければならぬと思っております。立派な人格者を目指す者の試合が単なる勝利至上主義であってはならないと思っております。そこで、愚見として、次のようなことを考えてみました。現実離れしているので一笑に付してください。

それは、試合中の反則に対して罰則を設けずに、指導をするということです。それによって試合者は有効打突に専念することができるという考えであります。もちろん、試合者はなるべく指導を受けないように努力するということも肝要であります。指導が多くて見苦しいことがあれば、大会当事者等がお互いに批評し合い、よい試合に対しては絶賛していくような雰囲気醸成できればと思っています。そしてその結果、感動する場面の多い大会であったという感想が聞かれるようなことになれば、感激も一入大きいものになると思います。

日頃の稽古においても、反則のことは念頭におく必要はないので、技の修練に専念でき、心も十分に練ることができるのではないかと思います。こうして不動の心で試合に臨めれば最高だと思います。

また、道場の内外での礼儀作法も大事だと思いますが、行き過ぎては人格形成に繋がらないと思います。さらに、大学の自治・自由も非常に大切だと思いますが、その真の意味を履き違えてよき日本文化が廃れてもいけないと思います。

とりとめもないことを思いつくままに述べてしまいましたが、結論として、お互いの人格を高め合う、立派な大会に育ってくれることを願っています。

最後に、貴連盟のいつその飛躍を期待するとともに、益々のご発展・ご隆盛を祈念して筆を置きたいと思ひます。

中四国学剣連への思い

剣道普及にむけて

評議員

青野晃治



中四国学生剣道連盟がこの度、発足四〇周年を迎えられましたことは、まことに喜ばしい限りで、心からお喜びを申し上げますとともに今後のますますのご発展を祈念いたします。

中四国学生剣道連盟は中四国における戦後剣道の復活の中で、非常に重要で大きな役割を果たしました。その過程を顧みますと、初代会長をはじめ歴代の会長、役員並びに学生幹事の皆様のご苦勞がう

かがえます。特に、常任顧問の植田一先生、故大森玄伯先生そして現会長の腰山静雄先生の存在と連盟に対するご功績を、私たちは決して忘れることができません。改めて、そのご努力に敬意を表す次第です。

さて、われわれ学生剣道の目指すべき道は、一体どこにあるのでしょうか。学生日本一を目標とし、あくまで勝利第一主義に徹するべきか、それとも、剣道の修行により、知性と質の高い技術に裏付けられた人間形成が目的なのか――。

私は、中四国学生剣道連盟においては、広い意味で剣道を通じて礼節を尊び、よりよい人間関係と文武両道を前面に、正しい剣道を指導普及することが望ましいと考えています。

今、剣道界は「剣道人口減」という厳しい事態に直面しています。そして、悲しいかな、さらにマイナースポーツの一つになりつつあります。どうすれば活性化が図られ、かつての剣道が復活するのか、私の考えを少し披露させていただきます。

①中四国圏内の優秀高等学校を選抜して、団体または個人戦の大会を主催。あこがれの強い大会の定着で、剣道の普及効果が期待できる。

②大会を各県持回りで実施。最近各校ともスポーツ施設が充実し、学生の見聞を高めるためにも、また、大会運営を経験するうえからも重要。このことは社会人になってもたいへん役立つ。

③各大学の国内、国外遠征について検討してはどうか。さらに、優秀大学、優秀選手の海外遠征なども考えてはどうか。

④学生幹事の先輩から申し送りを厳格、厳密にすると同時に、学生に積極的かつ自主的に運営を任せようか。

⑤中四国学生剣道連盟OB会をさらに充実し、OB関係者で資金面、学生の就職、結婚、推薦入学への努力などを考えてはどうか。

⑥各種大会での審判技術についてはいろいろ研究しているが、今もって注意、反則に気が取られ、肝心の有効打突を見落とす傾向にある。なお一層の統一見解の努力をお願いしたい。

⑦居合道の部門を取り入れたらどうか。また、格調高い日本剣道形の講習を多く持ち、さらに、素晴らしい中四国学生剣道連盟としてレベルアップを図ってはどうか。

以上、考えがまとまらず、思い付くまま筆を走ら

せました。表現が不十分なところも多々あると思いますが、お許しをいただきたいと思っています。

それが私たちの求める 剣道だろうか

評議員 大塚忠義



先頃、全剣連の機関紙である「剣窓」一〇月号を読んでいてアッと思ったことがあります。その記事は「国際化の波は高体連まで——日韓親善剣道試合を終えて」であり、高体連の剣道部長である岡村忠典先生が書いたものです。内容は韓国高校生から選抜された一五名の選手達と山梨、東京、神奈川の高体連の選手達との対戦結果、戦績表を中心としたものでした。

この中で、岡村先生は「驚くほど強くなっていた。山梨は親善に重きを置いて単独チームで試合を行なったので、インターハイベストエイトになった甲府校しか勝てなかった。東京・神奈川は連合軍を組んだこともあって全体として負け越すことはなかった。しかし、一つ一つの試合が接戦だった。引き分けの数からみても激戦の連続となったことは想像できる

と思う」とまとめ、中には一〇勝五敗一分とか、七勝六敗二分とか勝ち越して帰国した生徒もいたとい

います。
私がアッと思った理由は、韓国連合軍との試合が「厳しい試合」とか「勝てない試合があった」からではありません。柔道のように子ども、女性まで含む国際化が進めばいずれ負ける時はくるものです。もちろん、日本は努力しなければならぬわけですが、母国がいつも勝つとは限りません。驚いた理由は現行の試合ルールで負けると、このルールによる技や態度がそのまま日本の剣道であり、世界のJUDOになっ

てしまおうという思いからです。
知っての通り、学生の試合は「あてっこ剣道」と酷評されたりします。また、剣道の多くの試合は、延長戦の多さも含め時間は長くなりながら、一本勝ちがふえ、醍醐味である有効打突が少なくなっています。また、試合では勝つために適法な姿勢、充実

した氣勢という「より良い打突を求める」という人間の願いを規定している剣道の文化的特徴が表しくなっています。私はこうしたことを現行の試合ルールは、勝負の決着はつけることはできるが、剣道人が大事にしたい内容を高めたり創りだすものではないと考えてきました。言い方を変えると稽古における剣道はともかく、試合ルールは、剣道の培ってきた「より良い打突を求める」という文化性を表しきれない弱点を持っているということです。さらに誤解を恐れずにいえば、人間の本性を託せる剣道と試合ルールにおける剣道は明らかに違い、試合では本質的に剣士達は自分の価値観を縮小するか、わりきらざるを得ないものと捉えてきました。

日本の愛好者は、歴史的民族的な思想といえますか、技と道とか、剣道的な態度とか、刀の観念とか、侍とか、修養とか、段位審査の技の評価などを見た

り聞いたり教えられ、特有の観念や「らしさ」という美意識によって試合ルールの弱点をカバーし、戦い、その総体をもって剣道としてきたのではないのでしょうか？……それらの伝統や風土が違う外国・韓国や、子どもたちでは、今の試合ルールだけではどのような剣道となるのでしょうか。

今、日本では全日本剣道選手権大会への出場資格のオープン化などの問題から試合ルールの弱点が自覚され、部分的に訂正されようとしています。しかし、上記の問題はルールを元に戻すなどでは解消できません。どのような試合を通して日本剣道の特殊な文化価値を、国内も含めて国際社会に普遍化するのかという問いなのです。それは得点本数、試合時間、試合空間の検討は元より有効打突の質的な客観化と評価方法などの議論が必要であり、剣道をだれにでも分かりやすくする改善が焦眉な課題となると思われます。

しかし、並々ならない選手養成のリクルートシステムを持つとうとしている韓国スポーツ界、そしてその元での剣道の試合技術は、この議論や改善が達成される前に「驚くほど」に成長してしまうのではないのか？ 現行の試合ルールで負けてから、「実は日本の文化・剣道のルールとはこれこれの問題があり改正をしたい」とは日本からはいえないと思うし、それが通るとは思えません。ジュドーがJUDOと柔道となつてしまったように、二つのケンドーにならないように、また、引かれ者の小唄ではなく、国際社会の中で心底から日本の文化剣道を誇りにできるようにしたいものです。

日本の剣道は主に専門家の意見によって動向してきました。専門家は、宿命的に曰く言いがたしになりがちです。戦前の学生達が苦勞したように、今日の学生が自らの感性と知性と誇りによって国内・国

際ともに「分かりやすい」剣道を創造していつて欲しいと願うものです。

世界でも剣道を

評議員 小倉 肇



四〇周年を迎えた中四国連盟に対して心より喜び申し上げます。

私が岡山大学剣道部の学生であった頃、全日本学生剣道連盟が昭和四三年に発行した「全日本学生剣道優勝大会の思い出——一五周年を迎えて——記念誌」に私の拙文も載っています。

「地方の優秀な高校剣道選手は東京に集まる傾向がありますが、我々は田舎武士の意気でもって中央の連中に一泡吹かせてやろうと日々稽古に励んでおります。」

このような気持ちは今の中四の学生剣士達も持っていることと思います。「中四国を勝ち抜き中央に駒を進めて全日本の檜舞台でやってやるぞ」の意気込みを常に持って、日頃の稽古に励んで欲しいと思います。

また、日本国内だけでなく、剣道は今や世界中に

広がっています。日本古来の良き伝統・精神・文化は、当然とはいえ世界中で理解されてきているのです。我々も中四国地域のみならず、世界的な広い視野の下で剣道をとらえることが必要となっています。幸い岡山大学剣道部はこれまでにメキシコ、ドイツ、韓国からの留学生を受け入れた経験もあり、また一九八九年より一・二名の剣道部員を約一か月間、ドイツへ剣道留学生として送ってきました。更に一九九〇年には私が団長となり、杉本八郎師範、学生一七名と共にベルリン市へ遠征をしました。ベルリン自由大学の剣士を中心としたベルリン市剣道連盟の剣士達と稽古、試合を通じて交剣知愛の友好を深めたことです（写真参照）。

このような交流は、たまたま私が医学研究のためにドイツ留学した時に剣道具をかついで行ったのがきっかけになり、今日まで続いています。世界はますます狭くなりました。学生諸君が社会人になって、海外へ出張・滞在の機会も多いことですが、その時には剣道具と竹刀を持参して友好の輪を広げて欲しい



ベルリンにて学生とドイツ剣士達とともに

いものと思います。

学生の間に剣道の基礎をみっちり学んでください。その後も剣道を止めずに時間をつくって竹刀を握ってください。巧くなくても続けることです。

「不巧不絶」が私の座右の銘です。

中四国から全国へ

評議員 草間益良夫



中四国学生剣道連盟が、発足四〇周年を迎えられましたこと、衷心よりお祝い申し上げます。

中四国学生剣道連盟の「明日に向かって」を考えるにあたり、まず、過去を振り返ってみたいと思います。これまでの中四国連盟は、全国大会における大会結果をみますと、大きな組織である関東連盟や関西連盟、実力校の存在する九州連盟や東海連盟に比べて、どうしても良い成績を残すことができませんでした。

例えば団体戦の結果では、これまでに準々決勝に進めた大学は、男子では、昭和三年の岡山大学、平成二年の松山大学、平成五年の広島大学の三校であり、女子では、昭和六一年の香川大学、昭和

六二年の岡山大学の二校のみであります。

この低迷の大きな原因は、中四国連盟の地域性にあるように思われます。すなわち、中四国連盟の各大学が、「全国大会に出場する」だけに目標をおいていたからではないでしょうか。

確かに以前は、全国との間に「質、量」ともに大きな差があったと思います。しかし、現在では、地方連盟のレベルが向上し、連盟間の差は大変小さくなってきています。近い将来、その差はさらに小さくなるでしょう。このことは、中四国連盟にも、きつかけさえあれば、関東や関西の大きな連盟と十分に勝負できることを意味しています。

「明日に向かって」の中四国連盟は、このことをしっかりと認識し、全国大会で中四国旋風を巻き起こせるよう、計画的な活動をしていかなければならないと思います。

その一つは、全国大会の情報を、中四国連盟の各大学に確実に伝えることです。

伝える情報は、単なる大会結果ではなく、ビデオ等による試合内容や審判者会議における検討内容なども含めた情報です。このような情報伝達活動を通して、中四国連盟の各大学が、全国レベルの情報を持つようになり、日々の部活動が活性化されるものと思います。

もう一つは、中四国連盟の多くの大学にみられる「上級生の早期引退化」を見直すことです。そして、「最終学年の夏の大会までは現役」でがんばるような中四国連盟をつくることです。

このことは、中四国連盟の確実なレベルアップであり、「全国レベル」への大きなステップになると思います。

近い将来、全国大会で中四国旋風が起ることを期待し、微力ながら応援していきたいと思っています。

より一層の発展のために

評議員 境 英俊



学生剣道連盟の使命は全日本学生剣道連盟規約にあるように、加盟各学生剣道連盟相互の緊密な連携を図り、学生剣道の健全な発展に寄与することであり、また中四国連盟は全日本の一連盟としての働きはもちろんのこと、中四国地区の学生剣道を統括し、充実・発展させていく使命があります。そしてその目的を達成するためには、次のような事業が必要になると思います。

一、選手権大会をはじめとする各種大会の開催
二、研修会等の開催

三、合同稽古会の開催

四、記録の収集並びに保存

五、剣道人口減少に対する対策

各種大会の開催・運営につきましては、会場の確保・設営等、いつものことながら幹事長をはじめとして関係各位のご努力に頭が下がる思いです。しかしながら、はたしてどれだけの学生がその苦勞を理解しているでしょうか。学生の大会は全ての学生の協力により運営されるべきものだと思います。そこ

で今後の大会においては、一部の大学だけではなく、全ての加盟大学から役員を出すようにしてはどうでしょうか。実施上の問題はありますがぜひ検討していただきたい事項です。

研修会については平成六年三月によりやく第一回のリーダーズセミナーが実施されました。これまで開催されなかったことが不思議なくらいで、ぜひ今後も継続して実施していただきたいと思っています。ただ第一回目ということで、連絡上の問題等で全ての大学から参加が得られなかったことは今後の課題だと思います。

合同稽古会については、審判員・OBの稽古会は審判研修会に合わせ行なわれていますが、学生の稽古会は実施場所・時期・方法に問題があり、実現はなかなか難しいと思います。しかし各大学による合同合宿や練習試合を手がかりとして少しずつその輪を広げていくことは可能ではないでしょうか。

今回の四〇周年記念誌の作成によりこれまでの大会記録等ほぼ把握できることと思います。担当された方には心から敬意を表したいと思います。また今後五〇周年、一〇〇周年と益々発展していく中で、大会記録だけではなく様々な資料の収集・保存を幹事会、評議員会並びにOB会を中心に進めていく必要があるでしょう。

現在、剣道界では「剣道人口減少問題」が大きな課題となっており、特に若年層の人口減が問題点として浮かび上がっています。学生剣道連盟においても年々登録人員数が減少しているとのことです。高体連や中体連ですでにその対応策についての検討を始めています。これを機に我々学連でも、その原因を探り、手立てを講じていかなければならないと思います。そのためには、我々自身が剣道の本質を見極め、実践・継承していくことが大切でしょう。

学生諸君の奮起なしには学連の発展はありえませんが、さらなる活躍を期待します。

楽しい剣道の追究

評議員 田淵俊彦



中四国学生剣道連盟が発足以来四〇周年を迎えますことは、関係者にとりまして、この上ない喜びであります。また、加盟各大学は年々充実して多くの人材を社会に送りだし、各方面で立派に活躍されておられることは、剣道関係者にとりまして最大の誇りであります。

しかし、学生時代には剣道に精進しながらも、社会人になると、竹刀を手をすることがなくなってしまう方が多くあると聞いています。これは、本人の考え方でしょうか。時代の変化でしょうか。職場の関係でしょうか。中には私たち剣道指導者に責任の一端があるかもしれないことを畏れています。そこで、私の反省をふまえて希望を述べさせていただきます。

私は剣道をスポーツの一つとして考え、剣道以外でも肉体的に素晴らしいスポーツは他に多くあり、

礼儀も他のスポーツでも同様に身につくと思います、伝統的な日本文化とはあまり考えていませんでした。そのため、競技として試合に勝つための指導に重点を置きすぎていたのではないかと危惧しています。私が今まで剣道が続けてきたのは「好きだから続けた」ことが大きな要因ですが、「未知の奥の深さ」にも魅了されたからと考えています。中でも、剣道は技術・体力・年齢に応じて自由に課題を設定することができ、しかも、子供から老人まで、楽しく汗を流し、健康管理ができることに大きな魅力を感じています。

このように多々ある魅力を学生達に十分伝達していなかったのではないかと考えています。これからの学生諸君には剣道の楽しさを追究していただきたいと思っています。大会において、学生らしい、はつらつとした試合を見ると、何ともいえない爽やかな気持ちが出て、これが学生剣道であると感じます。ときに、勝負にこだわった試合、そして試合終了後に粗暴な態度の選手を見ることがあり、まことに残念です。人からやらせられる剣道から、自分からやる剣道へ脱皮し、課題をもって練習をすれば、楽しさが倍増すると思います。また、剣道は相手と二人で立派な剣道を創造するものです。相手を尊重する気持ちが大切です。

剣道の世界はタテ社会です。師弟関係や序列は剣道を学ぶうえでは大切であると思っていますが、上下関係だけでなくヨコのつながりを大切にして、部員間のみならず他大学との交流を深め、明るさと楽しさの漂う剣道部になって欲しいものです。

真の楽しさは厳しい精進によって生まれるものではないですが、この四〇周年を契機にして、「楽しい剣道をする」という気持ちで日々の練習に取り組んでいただきたいと思います。

王者の剣道を

評議員 光原達夫



このたび、中四国学生剣道連盟が発足四〇周年を迎えられ記念誌を発刊されますことを、心よりお祝い申し上げます。

ご存知のように中四国学生剣道連盟は、過去多くの選手を輩出し、中四国の剣道発展に大いに寄与されてこられました。私自身も、この中四国学生剣道連盟のOBの一員であることに誇りと責任を感じているところです。

学生剣道の素晴らしさは、相手を恐れず怯まず、常に先、先と攻め立て、捨て身で打ち込むところに魅力があります。窮地に立ったときも受け身にならず、勇猛果敢に攻めていくところに心を打つものがあります。それは剣道のみならず、日常の研究においても、また将来の進んでいく道においても、通ずるものがあります。また、相手に対する尊敬の気持ちの現れとしての礼儀も、いつの時代になっても大切なものです。社会の中で相手を重んじ、人間関係を大切にすることは、社会の発展の基礎になるものであると考えます。



大学時代に師範として指導いただいた故大森玄伯先生は、日頃われわれ学生に「正しい剣道を身につけ、指導者として、また人生の礎になるような王者の剣道を求めなさい」と言われました。このことは、私の心の中に永遠に残る教えであり、生涯求めていく道であると思います。教職に就き、中学生を長年指導するなかで、この教えは指導を行なう上での根幹になっていました。

試合をやれば勝ちたいと思う気持ちで一杯になります。負ければ悔しい。この気持ちは自然であり、また大切なものであります。しかし、日頃の剣道の稽古のなかで「自分に克ち、正しい剣道」を求めていこうとする気持ちが、充実した氣勢、旺盛な気力になり自分を強く伸ばしてくれと思います。

社会の変化は目まぐるしく、国際化・情報化の波は加速度的に訪れ、将来の予測ができないほどになってきています。これからは、こうした時代に対応できる活力のある創造的な人間が求められています。剣道を通して学んだ多くの宝物は、必ずやこれからの活力にもなっていくことを確信しています。

終わりにりましたが、これまで中四国学生剣道連盟のご努力いただきました歴代の会長をはじめ役員、OBの方々には深い感謝を表しますとともに、今後の益々の発展を祈念いたします。

大学間の交流を進めよう

会計顧問
森林 信



平成二年に建築業界から松山大学職員にトラバユし、平成五年より中四国学生剣道連盟の会計顧問を仰せつかっております。

松山商科大学時代で印象深いのは、三年の時、全日本学生剣道優勝大会に出場する機会を得て、当時から屈指の実力校国士館大学と対戦したことです。

桜木哲史（世界選手権者）、川添哲夫（全日本選手権者）、横尾英治（全日本選手権者）などのそうとうたるメンバーで、私は横尾選手と対戦し『あつ』という間に二本負けして、全国レベルがいかに凄いものか実感したものでした。そして、四年の時には中四国大会で優勝を経験する事ができず、剣道部生活を終えた事がほろ苦い思い出になっております。さて私の学生時代と比較すると、剣道のレベルは

推薦入試制度の導入などもあって中央との格差も以前に比べて縮まってきており、松山大学も平成二年に全日本大会ベストエイト進出という結果になって現れてきております。また、女子学生のレベルアップも顕著で、全日本大会入賞へは男子より早いのではと思わせます。

しかし今後のさらなる飛躍のためには、地道な鍛錬はもちろんですが、大学間の交流をより一層進める必要があるのではないかと思います。特に四国は交通の便が悪く、遠征等は時間的、経済的にも負担となりますが、積極的に進めたいと考えております。確かに剣道は強くなりましたが、残念な事には基本となる挨拶が良くできていないようです。昔は「挨拶で運動部の学生か、一般学生か見分けがつく」とよく言われたのですが、会釈をする程度の挨拶しか返ってこないケースが多く、がっかりする事が多いのも事実です。「強ければ良い」との風潮もあり、先生、先輩に対しての尊敬の念、挨拶等わきまえない学生も見受けられ残念に思います。また、組織と個々の役割についても充分には把握できていないように感じます。

今の学生たちは一方的な押し付けや命令には拒否反応を示しますが、自主性を尊重しよく話をすれば、理解し、行動できると思いますので今後ともしっかりと指導していきたいと考えています。

未熟ではありますが自己研鑽に励むと共に、指導者として学生の良き理解者として剣道の理念である『人間形成』を主眼に、勉学、人格とも立派な学生を育てるべく一層努力をしていきたいと思っています。また、中四国学生剣道連盟の一員として、諸先生方のご指導を仰ぎながら、学生役員と共に微力ながら中四国学生剣道連盟の発展向上に役立つよう努力してまいりたいと考えております。

スパイラルな関わりを

評議員 山神眞一



中四国学生剣道連盟の魅力は、家族的、友愛的なムードがあるということだと思います。私自身、学生時代は香川大学に在籍し、同連盟の一員としてのムードに感銘を受けました。今も忘れられない連盟としての思い出の一つに、全国学生剣道連盟地域対抗戦に中四国代表として出場したことがあげられます。そのときのチームメイトとの出会いは、まさに家族的、友愛的なムードいっぱいであり、社会人となった今でも付き合いが続いています。これは中四国連盟の醸し出すそのムードのお陰だと思っています。

最近になって、この全国地域連盟の大会は廃止されましたが、それに代わって、中四国連盟の規模における相互の研修を目的とした独自のセミナーが平成六年度からスタートしました。第一回のセミナーは、岡山県玉野市で開かれましたが、その内容はとても充実したものであり、主将を中心とした中四国の各大学の代表者約五〇名が参加し、講演、実技、研修、グループ討議、稽古会、懇親会など盛りだく

さんの興味深い内容が、新鮮な雰囲気であつた活発に行なわれました。指導者の一人として参加しましたが、そこで改めて中四国連盟の大学相互の家族的、友愛的ムードを感じましたし、このセミナーの意義を痛感した次第です。学生役員を中心として、その企画を練り、指導陣も一体となった実りあるセミナーでした。

研究、努力してきた道程を披露しあい、高めあう場が必要だと思えます。『中四国連盟は一つ』の合い言葉をもっとに切磋琢磨したいものです。そして、その発展の方向性は、家族的、友愛的なムードのもと、より高い次元を求めていくべきだと考えます。そのためには、相互にスパイラル（らせん形）な関わり方をしていくことが必要不可欠だと思います。中四国学生剣道連盟の益々の発展を願うとともに、各大学剣道部員一人一人のさらなる飛躍をいつも祈念しています。

地方都市でも大会を

評議員 湯村正仁

昭和37年中四大会で団体優勝
個人1・3位を鳥大が。3位に湯村先生。



中四国学生剣道連盟が発足四〇年を迎え、記念誌を発刊される運びとなったこと、ご同慶にたえません。委員の方々のご尽力に感謝申し上げます。

戦後の剣道復活の後、暗中模索の中で諸先輩方のご努力により中四国学生剣道連盟が発足し、この連盟が剣道を愛する学生諸君の拠り所となってきました。中四国の成績は、過去に全日本学生選手権大会の優勝者を輩出しており、現在でも上位に食い込む力を持っています。全日本女子剣道選手権大会でも優勝者と非常な接戦で敗れたものの、学生らしい堂々とした戦いぶりですばらしい試合をした場面もありました。とかく関東中心となりがちな学生剣道の中にあって、一人気をはいている観がします。審判員としてこれらの大会に出席し、中四国の皆さんの活躍ぶりを拝見することができ、喜びにたえません。指導しておられる方々の日頃のご努力を多とすることでもあると思います。

中四国学生剣道の剣風の特徴は、基本に忠実なオースドックスな剣道であることです。これこそ求めて止まない剣道であり、故大森玄伯会長をはじめ歴代の指導陣の残された大きな遺産であり、今後とも我々が引き継いでいかなければならない課題と考え

ます。今、指導者は世代交替の時期を迎えています。戦前に鍛えられた先輩方の剣道の在り方を記録し、後世に伝えていくのは今を置いて他にありません。なんとかこのことを実現したいものです。

現在の指導者の抱えている問題は、今の学生気質に対する戸惑いです。しかし、この問題はいつの時代にもあったはずで、時代の流れの問題であり、その状態に応じて対処しなければならない問題です。この中であって、剣道を通じてあるいは部活動を通じて得られる社会人としての基本的な訓練は指導していかなければならない課題でしょう。このような学生時代の部活動を通じてできることのなかに、大会運営の経験があります。鳥取大学ではこのような

機会は五年に一度の中国五大学の大会のみです。このような機会を通じて参加する一人一人が大会の運営上の苦勞を知り、対人接触の機微を知り、物の流れ人の流れを知ることが出来ます。現在の中四国大会は大きくなっていて費用の問題、審判員の問題、役員人数の問題など多々あり、大都市にてのみ開催が可能です。そこでもう少し規模の小さい大会を計画し、地方都市の学生にも大会運営を経験する機会が与えられないものでしょうか。全日本学生剣道連盟でもこのような計画を進めています。中四国でも考えてよさそうな問題です。

私も評議員の一人として今後とも当連盟の発展のため努力していく所存です。



メデイカル・スタッフの育成を

顧問医師 渡邊博義



中四国学生剣道連盟四〇周年おめでとうございます。

連盟顧問医師の立場から、医学的知識を持った学生（メデイカル・スタッフ）の育成を連盟に期待します。私は昭和五十六年三月に岡山大学を卒業し、平成元年に日本整形外科学会認定医に合格し、平成三年に同学会のスポーツ専門医の資格を得ました。現在整形外科医師として国立福山病院に勤務しています。学生時代の成績は、団体戦で全国大会二回出場（三回生ベスト一六、五回生一回戦敗退）と中四国大会の優秀選手（四回生）です。転勤が多い（卒業後一三年間に九回）のが幸いして各地の道場（岡山、岩国、広島、今治）で稽古でき、平成二年八月に六段合格できました。

同連盟との関係は、昭和六二年から大会救護医師として参加してからで、現在は連盟顧問医師になっています。現在の役割は、大会当日の救護と新人戦大会前日に学生代表者に医学知識等の講習会を行な

う事です。今まで救護係をやったのは、足サポーター等の許可申請者数を医師としてももう少し少なくできないかということでした。植田一先生は、試合は晴れの舞台であり、その舞台に足袋やサポーターなどをつけて出場するのは、好きになれないと言われています。現在、審判主任が装着後の許可申請者を公平の観点からチェックしています。医者とデータを一年間集計して損傷を起こしやすい学生をみつけ、それを防ぐアドバイスを探したいと思います。それができれば、許可申請がもっと有意義になってくると思います。

なってくると思います。

ところで、昭和六十三年から岡山県教職員代表チームのチームドクターとして全国大会に同行しています。この活動を通じて、社会人になっても役立つ医学的な知識をもつ剣道マンが増えることが大切であると感じています。メディカル・スタッフの具体的な活動は、大会時に自分の大学の日頃障害のある学生の診察の手伝いや講習会を通じて、剣道障害に対する救急処置とか予防を覚え、日頃の学生の剣道障害や健康増進に役立ててもらうことです。

当然、医学的な疑問点は下記のFAXまで尋ねてもらって結構です。現在〇八六―二八四―〇一七五(TEL&FAX兼用番号、須藤外科整形外科医院、岡山市一宮一七)のFAXを義父の許可を得て剣道マンからの相談を受ける窓口としています。平成五年新人大会前の講習会は同連盟へのアンケート直接検診の結果報告(足指の損傷に対する処置、テーピングの使用状態)を私が、平成六年は右踵痛の生じるメカニズムについての今までの文献の内容を高馬(岡山大学四回生)が報告しました。

最後に、メディカル・スタッフの育成を通じて、中四国学生剣道マンの人間としての奥行きが広がり、

それが学生剣道レベルの向上に一役を果たせたら、このうえなく幸せに感じます。

中四国学生剣道連盟の益々の発展を期待します。

情熱をもって当たれ

会計顧問 石井博貞



近畿大生時代ひょんなことから一年生の終わりに中四幹事をやることになり、合わせて二年生の四月には広島学剣連の幹事となりました。そして、六月には広島学剣連の春季大会を近大が主管することになったといういわれ、母校の先輩に相談すれど「わからん」のひと言。…(顔面蒼白)…それからというものの、毎週のように広島大学通い。…広島大学・広島工大の諸先輩の指導の下、無事主管校としての責務を果たすことができました。ひとつの大会を開催することの大変さをいきなり経験しました。

翌年の昭和五十三年には地方開催が初めてとなった全日本学生地域対抗剣道大会を広島で催し、住友幹事長を中心に多くの学生幹事が集い、情熱をもって大きな大会を成功させたことは、社会に出てからも多に役立ちました。華やかな舞台では、選手とし

て参加する者もいれば、それを支える者もいます。選手はその舞台を作ってくれる者へ感謝を、舞台作りの者は、選手が思う存分に活躍できるようにしてあげなくてはいいなと思います。

私は、今もできるだけ中四国の学生大会へ参加していますが、宿泊は決まってサウナを利用しています。ここに幹事長らをよく誘います。稽古などを一緒にできないので、このようにして裸の付き合いで学生との意見交換を重ねています。歴代幹事長の中には、山口と広島間で六時間の長電話をしたものもいます。その話題は連盟の将来像について話です。

連盟の仕事は、大会を開催することだけではありません。大きく言えば、剣道を通じて各個人が世の中へどのように貢献するか、その指針をどのように示せるかに幹事長らは取り組んでいるのです。学生剣道出身者が一番指導者となることが多く、その指導を受けた者が、また、学生として連盟に関与することになります。連盟のあり方を真剣に考える必要がありますが、学生役員は一年交代なので仕事を覚えたときは終わってしまうという悪循環からなかなか抜け出せないでいます。ただし、幹事長・副幹事長は役員を三年目に経験します。遊びや寝る時間を割いて連盟をより立てようと情熱をもって取り組んでいます。私は、その姿を見るのが好きです。人間にとって情熱はかけがえのないものであり、経歴などよりはるかに優るものだと思っています。

本連盟は学生自治の団体です。そして、最高議決機関は言うまでもなく、幹事会です。その構成は各大学幹事がなしています。幹事の一年交代はしかたのないことではありますが、幹事会を連絡会にするのではなく、各大学を代表して意見を述べ、連盟の諸問題についていっしょに事に当たって欲しいと願います。